

「草魂碑」と「草木塔・草木供養碑」への余話

森田 弘彦

2019年11月に、(公財)日本植物調節剤研究協会富山試験地の今井秀昭主任が「雑草防除の試験研究に携わった者として・草達の御霊を鎮魂するとともにお世話になった人々へのご恩に報いたい」気持ちを込めた「草魂碑」を、植調研究所(茨城県牛久市 図-1)、富山県農業研究所(富山県富山市)および植調協会富山試験地(同県砺波市)に建立された。今井氏の動機や先人の残した草木塔などについては、同氏の二つの記事(植調54(2・3), 2020, 植調北陸支部だより20, 2020)に詳しい。「山形県米沢市を中心とする置賜地方には、草木の慰霊・供養する大きな草木塔が、・・・人目の付くところにあると聞く(今井 前出。)」と、草木塔の本場でのことも解説されている。筆者は、コメの輸入自由化に抵抗する東北の農民魂の源として草木塔を紹介した全山形教職員組合執行委員長の新聞記事「草木供養塔(1994年10月)」を読んだことがある。そこで、手元にある草木塔の雑情報を集めて余話とする。

今井氏のおっしゃるように、草木塔や草木供養碑は山形県米沢市を中心とした地域に分布していて、その中心地の同市田沢地区では「草木塔の里」として観光案内をしている(<https://www.tazawa-forest.com/somoku/about.html>)し、市立米沢図書館の一区画には多数の解説資料が所蔵され、さらに山形県の植物に関する多数の著作で知られる結城嘉美氏は「草木塔の調査報告(山形県立博物館研報5, 1984)」

をまとめられた。したがって、山形県内ではよく知られていて、県の農業試験研究機関の方に尋ねて「ああ知っていますよ。」と即答されたこともある。しかし、その存在が同県内で知られるようになったのは第二次世界大戦後の1954年で、米沢市在住の佐藤忠蔵氏の調査を紹介した短い記事であった。ここでは「・・・斯る供養碑は置賜郡にのみ残り県内他に余り見ないことに照らし上杉藩が如何に治水治山に意を注ぎ領内に植樹を奨励したかを窺うに足るものと思ふ・・・」とある(緑化文化の草木供養碑 羽陽文化23, 1954: 図-2)。「上杉鷹山がつくらせたという記録も無いのだが、・・・」とわかっているが、旧米沢藩の名君鷹山公の施策と関連づけた下記の論考もある(遠藤 英「米沢学事始 上杉鷹山の訓え 明るい未来を拓くために・・・」, 2011)。

(確認されている最古の草木塔は鷹山公の治世に建てられたもので、1780(安永9)年7月19日に、米沢市入田沢の塩地平に建てられたものである。塩地平は小国山とともに、1772(安永元)年に江戸の大火で類焼した米沢藩桜田邸・麻布邸の再建用の木材が伐採された地である(中略)。伐採から草木塔建立までに少しの間があるのは、伐採後に新たに植林がなされたうえで供養がおこなわれたためかもしれない。

筆者は残念ながら未だ田沢地区に足を踏み入れているが、JR米沢駅に途中下車した機会に市内の上杉神社で新作



図-1 植調研究所(茨城県牛久市)の試験園場を見渡す場所に、今井秀昭氏によって建立された草魂碑



図-2 山形県置賜郡の草木供養塔を世に出した佐藤忠蔵氏の調査を紹介した記事(羽陽文化23, 1954)



図-3 現代の草木塔（米沢市上杉神社境内，2013年建立：A）と草木供養之碑（東京都葛飾区柴又帝釈天構内，2004年建立：B）



図-4 JR米沢駅から訪ねた草木塔関連の六面幢（米沢市東部小学校東），矢印部に「草木国土悉皆成佛 大乘妙典一万部」の文字，右奥には落下した笠部分（2019年9月）

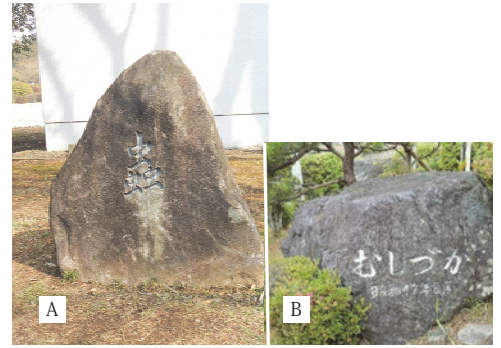


図-5 「職業上・研究上の殺虫供養に関する虫塚」の例，旧農業技術研究所構内（現農研機構 農業環境研究部門，茨城県つくば市：A）と福井県農業試験場構内（福井県福井市：B）

の草木塔(図-3-A)と「市立東部小学校東の塔婆型六角柱」(図-4)を見た。後者は、1966年の佐藤忠雄氏のまとめでは草木塔の一つとされたものの、結城氏の報告では草木塔から除外され、「その他記録されたもの 米沢市東部小学校東（六面幢）」と扱われた。この六面幢には「大乘妙典一万部 草木国土悉皆成佛」と刻まれていて、この語句が草木塔にもみられることから、この碑の草木塔との関連が示唆されるという（結城 上記）。

信仰心の欠如した筆者には知る術もないが、「草木国土悉皆成佛」は仏教の經典の一句だそうで、鎌倉時代後期の僧、無住一圓の仏教説話集「沙石集」に、「草木成仏とはどういうことか？」と問答を挑んだ客僧に、「それはさておき、ご自身の成仏についてはご存じか？」と応じたという高僧の、下記の逸話がある。

卷第三 四 禪師の問答是非の事

草河の故眞觀長老は、(中略)或時過世の僧、齡五旬にあまれるが、見参に入らんとあながちに申有りけり。たやすく人に對面する事なく、法門など申さる事もまれなりけるが、さてこの僧に對面して、何事の御用にやと問はる。天台の法門をかたのごとく承りて候に付けて、草木成佛の事、不審に候といふ。良久く返事なし。とばかり有りて、草木の成佛はしばらくおき候、御邊の成佛は、いかか御存知候と問はるに、その事は、いまだ何も存ぜずといふ。先づ其御用意があるべく候ひけるとて立入れにけり。この僧ことばなくにがりてぞ出でける。道人の問答は、生死の一大事を心に掛けて、無始の輪廻をたち、五陰の重擔をすてんと思ひて、直に問ひ、直に答ふ。これ參禪學道のすがたなり。(後略)

(筑士鈴寛校訂 「岩波文庫 沙石集上巻」 1943)

この話は、14世紀後半に「沙石集」の抜粋で編纂されたという「金撰集」にも収録されたし、また、時代が下って明治時代の中頃、石川県能登半島鳳至郡の老農泉 勘十郎氏は、和歌で綴った農書「新刻 皇州農業振起集，1889」を出版

して「第六十九 地質ヲ一般ト見ルハ大ナル誤リ」で、「釋尊も草木國土ことごとく 皆成佛といふておへたり」と詠んだ。つまり、「草木成仏」は日本の歴史上で長い間周知の教えであったようであるが、これを石に刻んで碑としたのは上記の限られた地域であった。

昆虫の世界には「虫塚」がある。昆虫学者・昆虫学史研究家で、北海道農業試験場（当時）の病理昆虫部長時代に筆者も多々ご指導いただいた長谷川 仁氏は、全国の昆虫仲間から得た虫塚などの情報を「I. 害虫多発時の供養に関するもの II. 虫送り・虫祭りの祈祷場を示すもの III. 趣味や職業上・研究上の殺虫供養に関するもの IV. 特殊な昆虫やその発生地などを記念するもの V. 昆虫に関する歌碑や句碑」に区分してIとIIの事例を記載し、IIIについては「(近年昆虫同好会や農事試験場その他によって建てられた)虫塚(例：図-4-A, B)のほとんどがごく近年研究者の建立となっている点は、後世どのような解釈がもたれることであろうか。」と記された(自然の文化誌 昆虫篇6 虫塚と虫供養塔，自然1976年6月号)。米沢市を中心とした古くからの草木塔はIIに、今井氏の草魂碑や葛飾柴又の帝釈天境内にある東京造園業組合の「草木供養碑(図-3-B)」などはIIIに含まれるのであろう。

草木も色恋のもつれで戦をするし(雑草のよもやま第9回，2017)，天上の神の庭から地上に落ちたヤナギの葉は魚のシシャモに変えられ(更科源蔵・川上澄生「北海道繪本」，1975)，江戸時代には、信心深い米屋が播いたトウモロコシが亡き娘の新盆時にハスの花をつけたり、伐られた老樹が赤い血を流したり(白井光太郎「植物妖異考」，1925)するので、要するに植物の動向は油断できない。植物や雑草の恨みを買うことが多いであろう「植調誌」の読者の方々には、「草魂碑」をあだやおろそかにすることのないようお願いしたい。